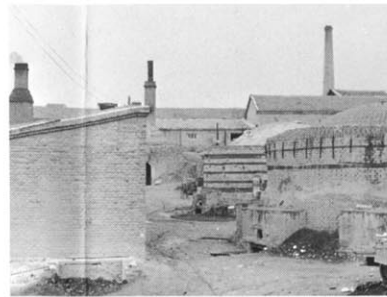


残像抄(3)

— 慌しい中国旅行 —

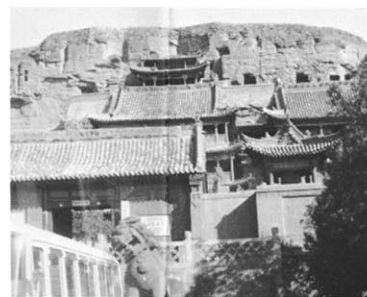
大和文華館 館長 石澤正男



No.1 煤窑口陶磁器工場 / 大同



No.2 楊月娥女士



No.3 雲岡石窟入口

かねがね私も中国旅行を希望していましたが、言葉に不自由のない在外中国人は別として、中国語のできない外国人は、経費の関係その他の理由もあって、どうしてもある程度の団体を組織して中国観光旅行に参加せざるをえないのが、現在の情勢のように聞いていました。折よく京都府医師会有志の方々が友好訪中団をまとめられようとしていることを伺い、これ幸いと参加させていただき、計らずも念願を果たすことができました。

日程は10月1日、日航機で大阪空港発、北京に向い、北京から大同、太原、西安の各都市を歴訪して、再び北京に戻り、10月13日中国民航(CAAC)機で北京空港発、成田空港着という日程でした。

団体の名称は京都府医師会友好訪中団で、京都私立病院協会と京都医家芸術クラブ所属の有志の方々とその夫人がたが主体で、他に私のような門外漢も少々参加を認められ、総勢16名の小団体でした。今回の中国旅行を斡旋してくれたのは中国旅行専門の新日本国際株式会社で、会社側からは中国語に練達で経験も豊富な古川平三郎君が随行員として参加され、終始一行の世話をいただきました。

ところで読者のうちには御存じの方も少なくないと思いますが、現在の中国旅行は、どの旅行斡施

業者を頼むにしても、それらの業者は必ず北京に総社のある「中国国際旅行社」と交渉して、事前にその同意をとりつけなければならぬことになっております。例えば希望する訪問先の都市の見学対象、詳細な旅行日程、時に面接したい人があればその人名と日時等をあらかじめ決めておく、といった工合です。団体旅行となればそれは当然のこととして首肯できますが、吾々にとって多少の不安と不便の感を与えるのは、行く先々の宿舎名は全部白紙状態とされており、現地に到着して国際旅行者の社員に会った時はじめて宿舎名の指示を受け、その指示に従わざるおえないことになっています。全く中国国際旅行社まかせということですが、この国際旅行社は各国語のできる社員を多数もっており、相手国の言葉のできる社員を応接させることになっており、現在も新人の養生に力を注いでいる様子でした。

吾々一行が大阪空港を出発したのは10月1日の正午すぎでしたが、現在日本の空港から北京へ行くのは以前と違って直行はできるのですが、まだ北上する空路は許されず、一旦は西南へ飛び、上海上空辺で北方へ転回するという大迂回航路をとっています。飛行時間は大体3時間40分とされていますが、中国は日本より時差1時間おそい

ので、吾々の塔乗機が北京国際空港についたのは現地時間で16時半でした。税関の検査は至って簡単でしたが、出迎えてくれた国際旅行社の人から、今夜北京には泊るホテルがない、どのホテルも超満員だと聞かされた時は、前もって予想はされてはいたものの、ひょっとしたら泊れるかも知れぬという一縷の希望の糸が断たれて、がっかりしました。

いうまでもなく10月1日は中国では最大の祝祭日である国慶節(建国記念日)当日ですから、この日の前後は北京に集まる中国人が非常に多いため、いきなり当日北京に乗りこんでも宿はとれないだろうと予測されていたのでした。それをあえて日程を組んだのは今度の中国旅行の唯一のミスだったようです。

とにかくその場では大同に行くより仕方がないので、空港からマイクロバス(これはトヨタのコースターという車で、約20人乗り、ゆくさきざきでこのバスが割りあてられました。)で一路北京市内へ向いました。道路は幅が広く、立派に舗装されているのはいうまでもありませんが、道の両側は柳、ポプラ、にれ(榆)、えんじゅ(槐)など、概して生長の早い落葉樹を三列及至四列に植えた複合並木とでも名付けたらよきそうな立派な街路樹が延々と続いており、すれ

ちがう自動車もほとんどないのが非常に印象的でした。

北京市内に入った時はもう薄暮になっていましたが、さすがに国慶節とあって街はどこも人で賑い、歩く人々と同じ位自転車をゆっくり乗りまわす人々の列が、これまた延々と続いていますが、自動車の氾濫する日本の都市に慣れている吾々には全く羨ましいほど、のんびりした印象を受けました。吾々のバスは北京駅に着く前に眩いばかりイルミネーションで荘厳された天安門一帯の官衛街を横目で見ながら、17時北京駅発包頭行の夜行列車で、あわただしく北京を後にせざるをえませんでした。

大同駅に着いたのは2日午前1時、深夜です。駅の応接室で小憩している間に、中国旅行社員と古川君との間で大同市滞在中の打合せがすんだと見え、マイクロバスで大同賓館へ導かれ、漸く落ちつききました。その日の午前中は休養、午後は銀行に寄り日本円を中国元に両替をし、それから訪ねたのは煤窑口陶磁器工場でした(写真No.1)。これは小規模のものですが、製品は土産用と輸出向けのものが主で、全部型を使用し、窯の燃料は、この附近一帯、即ち山西省産の極く上質の黒光りをしている石炭です。ここの工場長は楊月娥(写真No.2)という小柄な中年の女性で、吾々を愛想よく迎え、きびき



No. 4 大仏像(第20窟)



No. 5 秦始皇兵俑

びと質問に答えてくれました。

大同賓館に滞在中、食堂で旧知のニューヨーク・メトロポリタン美術館極東部の周方君夫妻とハーヴァード大学のクラストン教授夫人から聲をかけられ、お互いに奇遇を喜びあいました。奇遇といえば西安・北京間の飛行機内でベルリンの東亜美術館長ベアトリックス・フォン・ラーゲ女史が前席におり、これが今度の中国旅行中の三度目の奇遇でした。それというのも中国旅行が最近は以前に較べて遥に容易になったことを物語っている結果といえるかも知れません。

今度の中国旅行でのハイライトを二つに絞ってみました。第一は長らく修理のため閉鎖されていた雲岡石窟が今年から公開されたことと、第二は本年十月から公開されたばかりの秦始皇陵の兵馬俑を中心とする「秦始皇兵馬俑博物館」の見学でした。

雲岡石窟(写真No. 3)に割りあてられた時間は僅に3日の午前だけで、それには大同市から西へ16キロの距離を往復する時間も含まれているのですから、大小合せて53もある石窟に約5万1千余軀もある仏像彫刻を到底仔細に見るわけにはゆきません。しかし原作の与える印象は全く圧倒的に強烈で、いつか再遊の機会を念願せずにおられませんでした。写真No. 4は第

20窟にある高さ17メートル(東大寺の大仏は高さ16メートル余)もある最大の像です。制作は北魏時代(460~494)で、日本の仏像彫刻の祖型となるものであることは改めていうまでもないでしょう。

秦始皇陵は西安市の郊外にありますが、この陵の東方1.5km離れた場所で1974年3月、井戸掘削中の農民が素焼の人・馬像を発見したのがきっかけとなり、その後政府事業として発掘調査が行われ、現に継続中で、その全貌はまだ明らかになっておりません。しかしこれまでに第一、第二、第三の各坑から発掘された実物大の素焼の武人と戦車及び銅製の剣、矛、弩機、鏃等は莫大な数量に達していますが、それらの埋蔵地帯を保護し、全体を現状で見せるため全長230m、高さ22m、幅70m、の巨大な蒲葺形の建築物を作り、「秦始皇兵馬俑博物館」として、この10月1日から公開されました。屋内の撮影は禁止されているため、写真No. 5は案内書から複写したのですが、館内に一步踏みこむと、そこに展観される光景は、一瞬にして観る者の度胆をぬく壮烈さがあります。今後何年か経って、整備されたこの博物館を是非再び見る機会をえたいものです。

('79-11-3)

季刊 美のたより No.49

昭和54年 11月14日

発行 大和文華館